青森博物研究會會報　第四號
（昭和十二年二月）　別　刷

# 本州最北端、大間岬の生物相大觀

和　田　干　藏

謹呈

佐藤光雄様

# 本州最北端、大間岬の生物相大觀

和　田　干　藏

昭和十一年八月十五日から十九日迄一回、九月廿日から廿三日迄一回都合二回合計九日間下北郡大奥村大間附近の生物界を視察しましたが、植物は離島の辨天島で採取したものを、動物は大間と奥戸近海から捕れた物を主としこれに陸上で捕つたものを加へて會員諸君に御紹介申上げます。尙この間往復の途中で見たものも附添へて置きます。今回は通俗的にするため學名は省略しました。

## (一) 辨天島の動植物

辨天島は大間燈臺のある孤島で、航路が短いが波が荒いために渡島が容易でありません。昭和九年八月廿六日に一回上陸して採取しましたが、昭和十一年八月十八日に上陸した時には更に數種を採集することが出來ました。而し昭和九年の秋、村井三郎氏が京都帝國大學の田代善太郎氏を案内して上陸し採取したものには予の見たものより數種多かつた樣であります。又大間北日本博物館の職員が時々上陸して採取してゐますから、更に多數の植物が同孤島に發見されて居る筈であります。そこで予の調査したものだけを玆に書き並べておきます。

(1) きく科…… タンポポ　キレハアカミタンポポ　シロヨモギ
ヤマヨモギ　ノコギリサウ　アキノキリンサウ　シラヤマギク
ヲナモミ　ヒメムカシヨモギ　ヲグルマ　ヒメジヨオン
カウゾリナ　ゴボウ(逸出)　マルバヒレアザミ　ノコンギク
ハチヂヨウナ　オニノゲシ　エゾヲグルマ　タウコギ
オニヲトコヨモギ(辨天島特產)

(2) すひかづら科…… ソクヅ

(3) あかね科…… ヤヘムグラ

(4) おほばこ科…… オホバコ　エゾオホバコ　タウオホバコ

(5) むらさき科…… スナビキサウ(ハマムラサキ)　ハマベンケイサウ　キウリグサ(タビラコ)

(6) ひるがほ科…… ネナシカヅラ　ハマヒルガホ

(7) さくらさう科……シホマツバ ハマボツス コナスビ クサレダマ

(8) せ り 科…… シシウド セリ ハマゼリ ハマイブキボウフウ イハテタウキ アマニウ カラフトニンジン マルバタウキ

(9) かたばみ科…… タチカタバミ

(10) ふうろさう科…… ゲンノショウコ ハマフウロ

(11) ま め 科…… ハマエンドウ カスマグサ ヒロハノクサフヂ

(12) い ば ら 科…… ハマナス オホダイコンサウ

(13) あぶらな科…… ハマダイコン ハマハタザホ アブラナ(逸出

(14) あをつづらふぢ科…… アヲツヅラフヂ

(15) うまのあしがた科…… ハヒキンポウゲ センニンサウ

(16) なでしこ科…… ハコベ ウシハコベ オホバナミミナグサ ハマハコベ ハマツメクサ オホツメクサ ツメクサ カハラナデシコ

(17) すべりひゆ科…… スベリヒユ

(18) ひ ゆ 科…… ヒナタキノコヅチ

(19) あ か ざ 科…… ヲカヒジキ ハマアカザ ホソバノハマアカザ ハハキグサ(逸出)

(20) た で 科…… ギシギシ ニハヤナギ イヌタデ スイバ

(21) あ や め 科…… イチハチ(紫色の花) ヒアフギアヤメ

(22) ゆ り 科…… エゾスカシユリ スカシユリ エゾネギ マヒヅルサウ

(23) ゐ 科…… ドロキ キ

(24) うきくさ科…… ウキクサ(ウラベニウキクサ)

(25) かやつりぐさ科…… コウボウムギ 外數種

(26) い ね 科…… ヨシ(アシ) オホウシノケグサ ヒエ(逸出) メヒジハ ハマエノコロ ケカモノハシ キンエノコロ スズメノカタビラ(イチゴツナギ) 及び其他十數種

(27) と く さ 科…… スギナ
(28) うらぼし科…… オニヤブソテツ　外數種

上記の如く予の調査せる辨天島陸上植物は大約二十八科約九十四種であるが精細に調査してみるとまだ々々多數の植物が發見されると思ひます。而して該島の植物分布に就ては村井三郎氏が近き將來に訂正してくれる筈になつて居ります。百種に餘る該島の植物で學界に珍しいものは極めて少く、只キク科のオニヲトコヨモギだけでこれは本島特產と認められてゐります。尙島の波打際の岩礁にある海藻も數種を採りましたが、時間がないので詳しく調べかねましたから玆にはほんの僅かばかりの名前をあげておきます。他日大間博物館所藏標本を調べてから改めて發表することに致します。

(1) 紅 藻 類…… アカバ　アマノリ　アカバギンアンサウ　ダジヤスズシロノリ　ウミザウメン　テングサ　ツノマタ　ユナヱゴノリ　イトフノリ　フヂマツモ　フシツナギ　カニノテイソムラサキ　サンゴモ

(2) 褐 藻 類…… モヅク　ウルシグサ　マツモ(マツボ)　チガイソ(エゾワカメ)　ワカメ　ツルモ　マコンブ　アナメ　コナウミウチワ　アミヂグサ　ウガノモク　ホンダワラ　ウミトラノヲイシゲ　スジメ　シハヤハズ　エゾヤハズ　イトアミヂノコギリモク　エゾイシゲ

(3) 綠 藻 類…… アヲサ　アナアヲサ　アヲノリ　ホソジユズモジユズモ　ヒトヘグサ　フサイハヅタ　ミル

尙顯花植物のアマモ（リユウグウノオトヒメノモトユヒノキリハヅシ）及びスガモ(方言ゴモ)等があります。

辨天島には明治の中頃迄ウミネコが盛んに繁殖しましたが、島に建物が設けられて人出が激しくなつた爲め何時とはなしにその跡を絕つ樣になつたのであります。現在この島で繁殖してゐる鳥はバン、コヨシキリ、セグロセキレイ、ヒバリ、ハシボソガラス等でありますが、一種不明の水禽類が繁殖してゐます。蛇や蛙やトカゲの樣なものは見えません、ネズミは陸から荷物と共に移動したので非常に體軀も大きなものが居ります。昆蟲類はよく調べませんがモンシロテフ、エゾヒメシロテフを押へました。又、分布上珍らしいオウスミウスカハマイマイが居ることは不思議であります。

燈臺屋內には大形の蚊が澤山居ます。島の磯際にはウメボシイソギンチヤク、ミドリイソギンチヤク、ヒザラガヒ、フジツボ、イソバナ、ヨメノカサイトマキヒトデ、ウミケムシ、エボウシガヒ、アワビ、トコブシ、フナムシ

等の磯動物が棲息し夏はその景觀實に見事であります。

### (二) 大間近海産主要動物

大間の博物館に保藏されてあるものと實際予の見たものとを合せ、分布上北海道以北に餘り見られない樣なものと大間より南方に餘り見られない樣なものとが見られます。

(1) 海綿動物…… スギノキカイメン　エナガケツボカイメン

(2) 腔腸動物…… ヤドカリイソギンチヤク　センスガヒ　ウミヒバクシクラゲの一種　イガクリガヒ

(3) 棘皮動物…… ステイロキダリス—ミクロツベルクラタ（大形のウニ）ブリツサス—ラテカリナタス(大形のブンプクチヤガマ)　アカニチリンヒトデ　オキノテヅルモヅル

(4) 前肛動物…… コマホウズキガイ　タテスジホウズキガイ　ホウズキガイ　キタウスコケムシ　レプラリア—レチクラタ　ヒツポポネーラ—ヒツポプス　ツノコケムシ

(5) 軟體動物 …… ヒザラガイ　ケハダヒザラカヒ　イソアハモチ　ヒタチオビ　コロモガイ　テングニシ　ルリガヒ　ヤツシロガヒ　ウヅラガヒ　ホシダカラ　ダンベイキサゴ　トコブシ　ヒメアワビ　キナレイシ　フナクヒムシ　バカガヒ　マテガヒ　ベニガヒ　サクラガヒ　ウチムラサキ　ハマグリ　イセシラガヒ　カガミガヒ　トリガヒ　ヤヘウメ　トマヤガヒ　チリボタン　ヒアフギ　アヅマニシキ　ナデシコガヒ　ウミギク　アカガヒ　ベンケイガヒ　イヨシダレ　フネダコ　カヒダコ　ミミイカ　カミナリイカ

(6) 節足動物…… イハガニ　イシガニ　ガザミ　イボイテフガニ　サメハダヘイケ　トゲカイメンガニ　ヘリトリマンヂユウ　サメハダアフギガニ　ベニイシガニ　マメコブシ　ツノナガコブシ　ナナトゲコブシ　ヒラコブシ　カヒカクレ　アカボシコブシ　カツタイガニ　ワタクズダマシ　ヒシガニ　イガグリヤドカリ　フトミゾエビ

(7) 脊椎動物…… タウナギ　アミモンガラ　イトヒキアヂ　オニアヂ　カガミダヒ　キヌバリ　クサウヲ　ハナヲコゼ　クサビマンボウ　ハリセンボン　マカヂキ　ゴンズイ　ノコギリザメ　シユモクザメ　イカナゴ　ゲンロクダヒ　アカシタビラメ

アカカマス　クルマダヒ　タチウヲ　ツノザメ　ゴマサバ
メバチ　オホモンハタ　セグロウミヘビ　クロガシラウミヘビ
ゴンドウクヂラ　フイリアザラシ及び原索動物のイガボヤ等が見られます。

（三）大間附近陸産動物

陸水に産するものの内注目すべきはドヂヤウ、サハガニ、オホダニシ、ヲカマメダニシの一種、ヰモリ、ハコネサンセウウヲ、トウホクサンセウウヲ、カハシンジガヒ、ウマビル等で、兩棲類ではエゾアカガヘル、ヒキガヘル、シユレーゲルアヲガヘル、ヤマアカガヘル、ニホンアマガヘル、カジカガヘル等が居りますが、シユレーゲルアヲガヘルは一番多く棲息して居ります。爬蟲類にはヤカガシ、マムシ、シマヘビ、アヲダイシヤウ、ヂムグリ、カナヘビ等が普通に見られます。鳥類は澤山居りますが、季節的に出現するものが多く、春秋の渡りの時季には辨天島の燈臺に突死するものも尠くないとの事です。大間博物館にはアカセウビン、ジウイチ、オホコノハヅク、ツグミ、オホヨシキリバン、アカエリカイツブリ、ウミアイサ、ウミネコ、シノリガモ、ハシボソガラス、ウヅラ、シメ、ミサゴ、チゴハヤブサ、チヤウゲンボ、ハチクマ、ヨタカ、ウミスズメ、ヲシドリ、ミツユビカモメ、オホヂシギ、クヒナ、オホヨシゴヰ等が剝製になつて保存されて居りますが、山にはウグヒス、メジロキビタキ、カケス、ヤマセミ、四十雀類、クワツコウ、ホトトギス、ツツドリ、サンセウクヒ、ヒヨドリ、アカハラ、アカゲラ、コルリ、コマドリ、キジバト、アヲバト、ヤマドリ、キタキジ、里にはスズメ、ツバメが津輕地方より多く居ります。原野にはホホジロ、ホホアカ、ノビタキ、チゴモズ　海岸にはセグロセキレイが集つて居ります。哺乳類にはエチゴウサギ、モモンガ、カモシカ、サル、リス、ヒミズモグラ、アカネズミ、キツネ、タヌキ（ムジナ）、クマ、アナグマ、テン、イタチ、ヤマネ、ドブネズミ、ハツカネズミ等が居ります。大間博物館にはイヒヅナイタチ（夏毛）、ヒミズモグラ、エチゴウサギ（冬毛）、フイリアザラシ、ムササビ（バンドリ）、ヒメネズミ？ゴンドウクヂラの齒牙及び內臟、エゾアカシカの角等の標本が保藏されてあります。尙大間附近の陸產軟體動物にはペルリヒダリマキマイマイ、アヲモリヒトスヂマイマイ、パツラマイマイやウスカハマイマイ等もあるし、昆蟲類にはエンマコホロギ、イブキギス、カナブン、クロアゲハ、カブトムシ、シヤウジヨウトンボ、エゾヒメシロテフ、ヒメシロテフ等も捕られて居ります。

（四）結　び

大間部落は本州の最北端に位し三面は海洋に圍まれ、津輕海峽に突出して

寒暖二流に洗はれ、年平均氣溫は八度七分で青森市附近より寒いが、生物分布相が一風特色を發揮して居ります。即ち北方系統のものと南方系統のものが侵入して、本土在來のものと相混合してゐることがよく判ります。說明すると北海道以北のものと共通してゐるもの、大間を南限とするもの、大間を北限とするもの等が混淆して居ります。北限南限と限定した語を用ふと色々な誤が後で出て來るから、北限生物といふと南國にあるべきものが大間でも見つかつたといふ風に私が言ひたいのです。そこで今迄書上げた生物中分布上面白いと思ふのはカニ類、海綿類、海膽類等の海產動物や、蛙類、蝸牛類の陸產動物等であります。就中私の最も興味を惹いたのはカニ類と海綿類でありまして、これ等の多くは相模灣以南の暖地で採れてゐるのが、北方の大間でも相當に採れるといふことは、暖流に沿うて北へ北へと進んだが、大間と北海道との間に津輕海峽といふ障害物が出來たため、遂にここで進行が止り、大間近海に落付いたと云ひたいのであります。陸上動物の北進についても地質時代の橋が落ちたために大間に踏止り、遙に函館を眺めて居るだけになつたのでありますから、今でも北海道に移すと適應して繁榮する樣になります上記の動物中大部分は今日迄の所大間を北限と認めても差支ないことを斷言致します。又植物に就ては目下調査中ですから改めて、大間產北限植物として發表することに致します。而して大間生物中珍貴の物が多いが就中學界に注目されてゐるのは、 兩棲類のシュレーゲルアヲガヘル 即ち Rhacophorus schlegelii schlegelii (GUENTHER) で、熱帶動物因子がこの北方迄進移し旺盛なる繁榮を極め、而も青森市附近に認め得ざる習性を發揮し、昭和十一年度に於ては十月十三日午後七時頃低調であつたが盛に鳴いた（神精次郎氏の氣溫調査には20.2°C 風向東云々）といふ樣なことで、これを天然紀念物に指定する樣に手續が運ばれてゐます。尙大間部落には約二百年の齡を保つ大桑がありまして樹の大部分は强風のために傷められてゐるが、樹高が約十九尺根本の周圍約十二尺胸高周圍八尺六寸位あつて、役場の向ひの公益質屋の庭內に保存されてゐます。その他部落內にヤブツバキの植栽されたものが十數本盛に發育してゐます。又神社境內にはツキノキがよく發育してその林の梢端が海風のために恰度マツキー式の枯方をしてゐることがまた見事です

これを要するに大間附近は環境的に生物分布相が一寸風彩を異にして居ります。北方のものと南方のものとが相混合して居るが、北方系統のものよりも南方系統のものが多い樣に見受けられます。將來は必ず學界に注目せられることとなり海洋研究の機關が設けられることと信じます。本稿を終るに際し一言旅行の途中觀察した事項を添記して置きます。昭和十一年九月廿三日に大間から歸つた途中風間浦村易國間小學校で立派に生きてゐたモリアヲガヘ

ル Rhacophorus schlegelii arborea (OKADA et KAWANO) の雌を見たことであります。予は昭和九年八月發行の青森博物研究會時報第一卷、第一號、に於て同蛙は下北郡風間浦村赤川を最北限分布地點とすると發表しましたが今回更に北方なる易國間迄延長せられましたが、更に北方同村字蛇浦に於て西村英二氏が發見したといふので愈々該蛙分布が次第に北方に延びて居りますからこの蛙もシユレーゲルアヲガヘルと等しく大間の山間水邊に產卵するものでないかと想像するのであります。本稿を綴るに際し萬端の御援助を賜りました大間北日本博物館長 盛壽 同職員山谷英一、神精次郎並に友人村井三郎の諸氏に對し滿腔の謝意を表するものであります。

引用文獻

(1) 岡田喜一　原色海藻圖譜　昭和九年
(2) 大間小學校　大間教育自力更生の原理　昭和十年
(3) 酒井　恒　日本蟹類圖說　昭和十一年
(4) 平瀨信太郎　日本貝類圖譜　昭和九年
(5) 北隆館編　動物圖鑑　昭和二年
(6) 大島正滿　動物學汎論　上卷　昭和七年
(7) 牧野富太郎、根本莞爾　增訂日本植物總覽　昭和六年
(8) 山本岩龜、塚本角次郎　函館植物志　昭和七年